

略歴書

清野 純史 (きよの じゅんじ)

京都大学工学研究科 教授 博士 (工学)

【専攻分野】 地震工学

【本会活動】

理事 (事業) : 2012 年 5 月～2014 年 5 月

副会長 : 2017 年 5 月～2019 年 5 月

17WCEE 幹事 (学術プログラム委員会副委員長)



【略歴】

1981 年 3 月 京都大学工学部土木工学科卒業専攻

1983 年 3 月 京都大学大学院工学研究科土木工学専攻修了

1983 年 4 月 京都大学防災研究所・助手 (1983～1993)

1993 年 4 月 山口大学工学部・助教授 (1993～1997)

1997 年 4 月 京都大学工学研究科・助教授／准教授 (1997～2009)

2009 年 3 月 京都大学工学研究科・教授 (2009～現在に至る)

2009 年 4 月 立命館大学特別招聘教授(2009～2012)

2012 年 4 月 京都大学地球環境学堂・教授 (併任) (2012～2016)

【受賞】

2004 年 5 月 地域安全学会論文賞受賞

2004 年 9 月 日本自然災害学会学術賞受賞

2017 年 2 月 土工技術 2016 年度最佳論文奨 (台湾)

2019 年 11 月 ガス保安功労者経済産業大臣表彰

【委員会活動 (直近 5 年間)】

JICA アセアン工学系高等教育ネットワークプロジェクト国内支援委員(2008 年 9 月～現在)

阪神高速道路(株) 技術審議会委員(2009 年 9 月～現在)

人と防災未来センター上級研究員(2010 年 12 月～現在)

防災科学技術研究所 E-ディフェンス利用委員会委員(2011 年 12 月～現在)

日本ガス協会 ガス工作物等技術基準調査委員会委員 (2015 年 7 月～現在)

国交省近畿地整・阪神高速道路(株) 大阪湾岸道路西伸部技術審議会委員(2017 年 9 月～現在)

JICA ミャンマー工学教育拡充プロジェクト国内支援委員会委員(2018 年 9 月～現在)

内閣府「南海トラフ沿いで異常な現象が観測された場合の防災対応ワーキング」(2018 年)

土木学会地震工学委員会 「断層変位を受ける地中管路の設計手法に関する研究小委員会」
委員長(2018 年 4 月～2020 年 3 月)

【著書および主要論文 (代表的なもの 10 編以内)】

1) Farzad Talebi and Junji Kiyono: Introduction of the axial force terms to governing equation for buried pipeline subjected to strike-slip fault movements, *Soil Dynamics and Earthquake Engineering*, Volume 133, June 2020, 106125. <https://doi.org/10.1016/j.soildyn.2020.106125>

2) Aiko Furukawa, Hiroki Yoshikawa and Junji Kiyono: Investigation of the Tsujun Bridge damage mechanism during the 2016 Kumamoto earthquake, *自然災害科学 J. JSNDS*, 38 特別号, pp.1 -23, 2019.

3) Pyi Soe Thein, Junji Kiyono, Tun Tun Win, Than Than Nu and Day Wa Aung: Seismic Microzonation of Mandalay City, Myanmar, *Journal of Geological Resource and Engineering*, 6, pp.1-13, 2018.
[doi:10.17265/2328-2193/2018.01.001](https://doi.org/10.17265/2328-2193/2018.01.001).

4) Zin Zin Nwe, Nan Pawt Sai Awar, Aye Mya Cho, Kyaw Moe Aung, Maki Koyama and Junji Kiyono: Development of Damage Patterns and Fragility Curves in Brick-nogging Buildings from the Thabeikkyin

Earthquake, Myanmar, 2012, Journal of Earthquake Engineering, pp.1-19, 2017. <https://doi.org/10.1080/13632469.2016.1277439>

- 5) 李 徳河・呉 建宏・蔡 百祥・林 宏明・清野純史：美濃地震台南震害區之大地環境特性，土工技術，No.148/2016.6, pp.45-57, 2016.
- 6) 四井早紀・小山真紀・古川愛子・清野純史：東日本大震災における福島県内市町村を対象とした避難ルート特性と死亡率の分析，地域安全学会論文集，No.27, pp.85-93, 2015. <https://doi.org/10.11314/jjss.27.85>
- 7) Bhuddarak Charatpangoon, Junji Kiyono, Aiko Furukawa and Chayanon Hansapinyo: Dynamic analysis of earth dam damaged by the 2011 off the Pacific coast of Tohoku earthquake, Soil Dynamics and Earthquake Engineering, 64, pp.50-62, 2014. <https://doi.org/10.1016/j.soildyn.2014.05.002>
- 8) 清野純史：地震とライフライン被害，活断層研究，第 28 号(特集号)，pp.95-106，2009.
- 9) 清野純史・藤江恵悟・太田 裕：組合せ震度の提案・定式化とその応用について，土木学会論文集，No.612/I-46, pp.143-151, 1999. https://doi.org/10.2208/jscej.1999.612_143
- 10) 清野純史・三浦房紀・八木宏晃：個別要素法を用いた被災時の避難行動シミュレーション，土木学会論文集，No.591/I-43, pp.365-378, 1998. https://doi.org/10.2208/jscej.1998.591_365

【所信】

2001年に設立された日本地震工学会は、今年度20周年を迎えます。土木・建築・地盤・地震・機械などの専門家、研究者や実務者、学生が集まり、地震工学という旗印の下に分野横断的な学際学会を標榜した日本地震工学会は、過去20年の間、学会員や関係者各位の様々な活動や支援に支えられ発展してきましたが、我が国の地震工学研究が、世界に冠たる先進技術として引き続きその地位を維持拡大して行くためには、更にこれから20年30年と最大限の努力を傾注していかなければなりません。

近年の社会を取り巻く環境の変化は目まぐるしく、国際的な動向にも目が離せません。英国のEU離脱や現代の米国に代表されるような反グローバル化の動きに鑑みると、グローバル化が叫ばれてきた時代が、新たな変革の時代に向かっている事を示唆しています。

地震工学会も、会員一人一人のニーズの変化や多様性を考えると、この学会の次なる進化や改革が求められるのかもしれませんが、しかし、変わらないもの、敢えて変えてはいけないものもあります。これまでも調査研究活動の推進と社会への還元、学会論文集の編集と発刊、年次大会および各種シンポジウムの円滑運営、学会誌の充実、地震災害への迅速な対応などは、学会事業の円滑な運営と適切な予算管理の下で継続して行われています。学会の長期的なビジョンの醸成はもちろんの事、前述のような恒常的な活動をまずは盤石なものとするべく、特に、研究委員会数の増大、地方開催も含めた年次大会の活性化、学生会員の増員と正会員への円滑な移行に注力するとともに、新たなる力点の置き所として、途上国に特化した地震工学の技術支援・教育支援への道筋の構築や、運営会議開催方法の抜本的改良が必要ではないかと考えております。

歴代会長のご尽力で3回目の日本開催となる本年度の17WCEEは、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で2021年に延期となりました。日本地震工学会は主幹学会として、最先端を行く日本の地震工学の研究や技術、関連する様々な取り組みを積極的に世界に情報発信するとともに、その成功に向けて引き続き全力で取り組んでいかなければなりません。

20年ということは人で言うところには成人であり、成人にはまだ無限の可能性が 있습니다。もし会長に推挙されましたならば、現中榎会長の下で研鑽を積み、上記所信を実現すべく尽力してまいりたいと思っております。

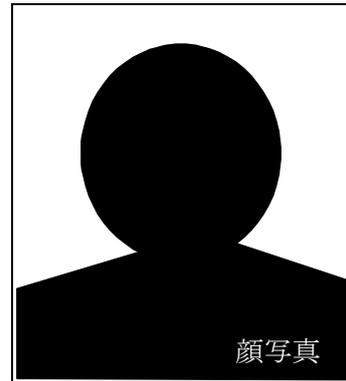
略歴書見本（会長・監事共通）

工学 太郎（こうがく たろう）
〇〇大学工学系研究科 教授、工学博士、技術士

【専攻分野】 〇〇〇〇

【本会活動】

理 事（〇〇担当）：200〇年〇月～200〇年〇月
〇〇〇〇に関する研究委員会委員
：200〇年〇月～200〇年〇月



【略歴】

19〇〇年 〇〇大学 工学部 〇〇〇〇 卒業
.....
.....
.....
19〇〇年 〇〇大学 准教授（工学部）
19〇〇年 〇〇大学 教授（工学部）
20〇〇年 〇〇大学 教授（工学系研究科）

【受賞】

〇〇学会 〇〇賞（〇〇年）
〇〇学会 〇〇賞（〇〇年）

【委員会活動(直近5年間)】

・ 〇〇〇〇委員会 〇〇委員（20〇〇年〇月～20〇〇年〇月）
・
・
・
・
・
・
・

【著書および主要論文(代表的なもの 10 編以内)】

・ 〇〇〇〇〇〇〇〇〇
・
・
・
・

